

第44回

名古屋大学附属図書館友の会
トークサロン

ふみよむゆふべ

『日本の現代戯曲を読む』

—清水邦夫作品をめぐって—

かたり：杉山 寛行 氏（岐阜市立女子短期
大学長、元本学理事兼副総長）

読んで楽しい!

現代戯曲



演劇という表現は、詩や小説、映画などに較べて、「時代性」をより迅速に、より直接的に作品に取り込むことができます。しかしその基礎となる戯曲作品は、それ自体では自立せず、演出家を初めとするスタッフ、演技者、劇場空間などなどによって、総合的に具現化されます。それだけに一回性という大きな特徴も持っています。

1960年代から1990年代にかけて、日本の現代演劇は大きくその姿を変えました。社会全体の変化に対応し、そのエネルギーを吸収し続けたからです。当時の戯曲群を読むとその痕跡を生き生きと読み取ることができます。しかし同時に「一回性」であったことからくる時間の流れの中で抜け落ちていったもの、逆に異なった角度からの光があたることによって、新たに浮かびあがってくるものもあります。

今回は、1960年代から1990年代にかけて活躍した戯曲作家の一人、清水邦夫の作品を取りあげ、「読む」ことによってこうした「二重性」について考えてみたいと思います。

2018年11月26日(月) 午後6時～

名古屋大学中央図書館2階高木家文書資料館

参加無料
申込不要
会員以外の方も歓迎します

名古屋大学附属図書館友の会

TEL 052-789-3684

FAX 052-789-3694

E-Mail tomo@nul.nagoya-u.ac.jp

URL <http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tomo/>

(後援)

名古屋大学

附属図書館,

同 研究開発室

